

行雲流水

No.258 令和4年10月25日発行

遅読の克服

校長 寒河江 正人

生徒諸君。

世の中には、「ななめ読み」などといって、「速読」できる人がいるようだ。
本や新聞、雑誌などをすいすい・すらすらとハイスピードで読んでしまうという。
そういう人は、どんな目の動き、どんな脳の働きなのか、私には想像がつかない。

一方、私の場合は、その真逆で「読む」のが遅い。

のろのろ、もたもたしていて、なかなか先に進まない。

小説でも、マンガでも、一度読んだところに何度も戻って読んだりする。

「あれっ？ あの場面って、どうなってたっけ。」

「あの登場人物は、どんなこと言ってたっけ。」などと、戻ることがしばしばなのだ。
だから、1冊を読み終えるのに、他の人よりも余計に時間がかかってしまうようだ。

たとえば、テストのような場面では「速く読む能力」は、きっと優位かもしれない。
与えられた制限時間内で、余裕をもって問題を解くことができるのかもしれない。
そういう点では、私は他の人よりも劣っているということになるのかもしれない。

でも、私は、そういう自分の「読み方」は、決して嫌いではない。

なぜなら、「あんまり速くはない」けれど、早とちりの「読み間違いが、ほぼない」。

「内容の理解、意味の取り違えは、ほぼない。正確である。」と思われる。

どんなに「周囲の人より速くても、不正確な読み・理解」では、まずいであろう。

「より速くて、なおかつ正確である」ことが、一番望ましいということなのだろうが、
私のように、それが苦手なタイプの人もあるものだ。

だから、私は「毎日、文章を読む習慣を欠かさないこと」を自分に課している。

5分でも、10分でも、少しずつで構わない。一日のちょっとしたスキマ時間を活用する。

その時間だけは、意識を集中して、目の前の「文章の内容を正確に理解する」ように、

「自分の脳の動きを慣らしておく」ように心がけている。

これが、「程よい速さ」と「正確さ」を一定水準以上に保つ秘訣だと考えている。